

## 第Ⅵ章 結 語

本書は平城宮跡第一次大極殿院地区についての2冊目の発掘調査報告書である。

平城宮中枢部の復原に向けての探求は、すでに19世紀半ば、嘉永5年(1852)に北浦定政が平城京研究の成果として示した「平城宮大内裏跡坪割之図」に始まる。測量の精度からみてもきわめて正確に描かれているこの図の、平城宮跡にあたる方八町の範囲を特に太く朱線で囲み、「平城宮」と朱書している。その範囲の中に「大黒殿」「大宮」「内裏ノ宮」などの地名が明記されており、定政は平城宮の位置だけでなく、宮中枢部分の所在も明らかに認識していたことがわかる。

平城京についての研究は、明治維新をはさんでしばしば中断するが、明治40年前後に関野貞により再び着手される。平城宮中枢部に関していえば、遺存する土壇などの地形や地割、地名に立脚せざるを得なかった研究段階にあって、やむをえないことであったが、関野はこんにち明らかにされている第二次大極殿、東区朝堂院を唯一の中枢宮殿地区として理解を進めた。その際、本報告書の対象としている第一次大極殿院地区は、史料にあらわれる「南苑」ではないかと推定されていたのであった。<sup>1)</sup>

1960年代以後、平城宮中枢部分についての奈良文化財研究所による継続的な発掘調査研究が進められ、平城宮には朝堂院区画が中央と東側の2箇所が存在することが明らかになった。これは中央区から東区への移転によるものとの認識がなされ、「第一次朝堂院」「第二次朝堂院」の呼称があげられることになり、また「第一次内裏」「第二次内裏」との理解もおこなわれた。

いっぽう、1970年の「第一次朝堂院」の北側での発掘調査を通じて、東側に土壇として遺存していた「大黒の芝」ないし「大黒殿」と伝えられてきた大極殿よりも大規模な基壇が確認された。そしてそれが恭仁宮跡に残る大極殿基壇の平面規模に一致することがわかったことにより、『続日本紀』にみる平城宮大極殿が恭仁宮に移築されたとの記録の正しさが実証されるとともに、平城宮の当初の大極殿が「第一次朝堂院」の正北にあった事実が明確になった。

1978年におこなわれた東側の大極殿つまり第二次大極殿についての発掘調査で、基壇の下層に大規模な掘立柱建物がみつかった。1980年代以降に「第二次朝堂院」の発掘調査が進み、区画内東半部にある6堂すべての基壇下層に上層朝堂建物とほぼ同じ規模の掘立柱建物があつたことが明らかになった。つまり、中央と東の朝堂院は奈良時代当初から併存していたのであり、従来の第一次→第二次という説明は不適切であることから、以後、「中央区朝堂院」「東区朝堂院」と呼称を変更するに至った。

東区上層の朝堂院の正殿としての位置をしめる第二次大極殿は、天平17年(745)の平城京遷都後の天平勝宝年間(749~757)に新たに造営されたとみている(『平城報告Ⅳ』)。第二次大極殿下層の掘立柱建物は大安殿であるとする意見が有力であるが、南側の東区下層朝堂院や北側の内裏とともに平城宮造営当初に計画され造営されたとみられる。内裏は区画内の建物配置を6期にわたり大幅に改変しつつも、奈良時代を通じて同じ場所に営まれていた(『平城報告Ⅳ』)。

それに対して第一次大極殿のあった地区では遷都後に、平城宮内で最大規模の総柱建物を含むおよそ27棟と推定される掘立柱建物群が整然とした対称形をとって造営された。

奈良時代の史料によると、平城宮内の天皇や三后、皇太子の居所にかかわる宮殿名称として内裏、中宮、中宮院、東院、東宮、春宮、西宮などがあり、それらの存在した時期や場所についての比定をめぐり、かねてから議論が積み重ねられてきた。この課題に関しては、平城京だけでなく、古代各王宮、都城の発掘調査の最新の成果にもとづいた議論が展開されており、さまざまな新知見、新見解が提示されている。本書でも、第一次大極殿についての最初の報告書である『平城報告Ⅺ』以後に進捗した大極殿院回廊および周辺の発掘調査の新たな成果を踏まえ、上記比定研究をいっそう深めることができた。その委細は本書「第Ⅴ章 1 遺構変遷と地形復原」や「第Ⅴ章 2 史料からみた第一次大極殿院地区」に尽くされているが、ここでその概要を記すとともに、平城宮中枢部全体の変遷そして今後の研究課題に言及しておく。

〔Ⅰ期〕

Ⅰ期は平城宮造営当初で、第一次大極殿が建ち、築地回廊とともに第一次大極殿院が構成される。Ⅰ期は、さらに4つの小期に分かれる。

Ⅰ-1期（和銅3年3月から霊亀初年まで〔710年～715年頃〕）

第一次大極殿院の造営期と位置づけられる。和銅7年（714）の末頃までに、第一次大極殿SB7200と、南門SB7801、築地回廊SC5500・SC5600・SC7820・SC13400・SC8098の造営で一段落する。この時、中央区朝堂院地区の造営は未着手で、霊亀元年（715）頃、第1次整地がおこなわれたかと思われる。第1次整地面に南北塀SA8410の柱掘方と掘込地業SX9199が掘られるものの、造営途中で埋め戻される。SD3765が基幹排水路として機能した。

このように、和銅3年（710）の遷都当初の数年間、平城宮の南面中央門である朱雀門（大伴門）の北側の宮殿施設は未整備の状態であった。平城京遷都の喫緊の理由がこの中央区の施設とは直接のかかわりをもっていなかったのか、あるいは大極殿をはじめとして礎石建ちの大規模な殿堂群の建設に長期間を要したからなのか、即断はできないが、重要な分析課題として今後に残される。

この時期に東区では内裏、大安殿、下層朝堂院そしてそれぞれを囲む区画施設が、壬生門北に中軸線を一にして、いずれも掘立柱構造の建造物として造営された。東区の下層朝堂院は、遅くとも和銅6、7年（713・714）には完成していた。内裏はこの時期、内裏Ⅰ期としている元明・元正天皇の御在所である（『平城報告Ⅻ』）。

Ⅰ-2期（霊亀年間から天平12年まで〔715年頃～740年〕）

中央区朝堂院の造営、第一次大極殿院西辺の佐紀池SG8190周辺の整備にはじまり、南面築地回廊に東楼SB7802および西楼SB18500が増築される時期である。霊亀年間（715～717）から養老年間（717～724）にかけて、朝堂院に第2次整地が施され区画塀SA5550A・SA9201A・SA9202が建てられるが、この段階に門などの閉塞施設はつくられていない。これにともない、基幹排水路はSD3715につけかえられる。続いて第3次整地が施され、朝堂SB8400・SB8550、朝堂院南門SB9200が造営される。この間、養老年間（717）には中央区朝堂院は「西朝」と呼称されていた。内裏は内裏Ⅱ期にあたり、聖武朝の前半期の御在所として、内裏Ⅰ期に比べかなり充実した施設群が造営されていた。第一次大極殿院西辺では、養老末年頃佐紀池SG8190

が整備される。その後、南面築地回廊に東楼SB7802・西楼SB18500が付設されるが、SX8411出土木簡の年紀による限り、天平3年(731)頃の可能性が高い。

東楼について、造営推定年代と東楼所用軒瓦の年代との若干の齟齬が指摘されたが、本書「第V章 4 軒瓦からみた第一次大極殿院地区の変遷」で論じたように、軒平瓦6304C・軒丸瓦6664Kの年代観の下限をどのように捉えるかにかかわり、軒瓦についてのなおいっそうの分析の深化が必要と思われる。

東楼、西楼は南面築地回廊の一部を壊して付設されているが、これは東西楼が平城宮造営当初の計画になかったことを示す。一對の楼閣建物は、位置関係を異にするものの、藤原宮では大極殿院に近接して存在していたこと、さらに宮中枢部分の高層建物として王権の威信を示現する機能をもっていたと考えられることからすると、平城宮造営当初での欠落はいささか不可解な状況といわなければならない。藤原宮で一元化していた宮中枢部を平城宮では中央区と東区に分化した試行にともなう錯誤であったのか、どうか。

#### I-3期(天平12年から天平17年〔740年～745年〕)

平城京が一時、首都の機能を失い、恭仁京、難波宮、紫香樂宮への遷都を繰り返した時期にあたる。大極殿SB7200および東西の築地回廊SC5500・SC13400が恭仁宮に移築され、回廊の空白部分は南北塀SA3777およびSA13404により閉塞される。朝堂院では、区画塀が仮設的な塀SA5550B・SA12950へと改修される。

#### I-4期(天平17年5月から天平勝宝5年末頃まで〔745年～753年頃〕)

『平城報告Ⅱ』では天平17年(745)の平城京遷都直後の「第一次大極殿地域が復興する時期」と評価し、東西築地回廊が再建されたとみていた。今般、その後の調査成果などにもとづいての再検討を通じて、築地回廊の再建はなかったことを明らかにし、むしろこの遷都後の天平勝宝年間(749～757)の前半までに、かつて第一次大極殿建物のあった場所一帯にⅡ期に機能する宮殿施設群が造営され、天平勝宝5年(753)頃以降に第一次大極殿院の南面築地回廊SC5600・SC7820、南門SB7801および東楼SB7802・西楼SB18500が解体されると判断した。

### 〔Ⅱ期〕

(天平勝宝年間前後から宝亀初年頃まで〔749年頃～770年頃〕)

奈良時代半ばから後半までの、もう一つの御在所として機能する時期である。この期間を通じて「西宮」と呼ばれることが多く、その後半は、称徳朝の西宮であることはほぼ確実であろう。称徳天皇は神護景雲4年(770)に、この「西宮寝殿」で崩御する。

宝亀年間から延暦年間まで(770～806)にも建物の一部は残存していた可能性が高いが、具体的な利用の形態は不明である。南の中央区朝堂院では、区画施設が築地塀SA5550Cに改作される。

このⅡ期と併行する時期に、東区朝堂院は礎石建ち瓦葺きの12棟の朝堂に建て替えられ、「太政官院」と称されるようになる。掘立柱構造であった大安殿は朝堂同様に瓦葺き殿堂に改築される。この建物の新営は天平勝宝年間(749～757)に遂行される。これが第二次大極殿である。内裏地区でも内裏Ⅲ期の宮殿区画の造営がおこなわれる。区画施設は内裏Ⅱ期までの掘立柱大垣を廃して、同位置で築地回廊を造営する。第一次大極殿院、第一次大極殿地区Ⅱ期つまり西宮とこの内裏Ⅲ期のいずれも区画施設として複廊築地回廊が採用される。平城宮において官衙

区画、宮殿区画を限る施設として掘立柱塀、築地塀、単廊回廊、複廊回廊があるが、複廊築地回廊はそれらの上位に位置づけられる、最も格の高い区画施設である。以後、内裏地区は孝謙太上天皇によって改築される内裏Ⅳ期、宝亀元年（770）に即位した光仁天皇の御在所である内裏Ⅴ期、桓武天皇の内裏第Ⅵ期と変遷し、奈良時代の終焉を迎えた。このⅥ期にいたってはじめて平安宮内裏を構成する紫宸殿、仁寿殿、常寧殿などに相当する殿舎が平城宮に出そろい、平安宮内裏の骨格が成立する（『平城報告Ⅻ』）。

〔Ⅲ 期〕

（前半：大同4年〔809年〕11月～天長2年〔825年〕11月・後半：天長2年11月以降）

その前半は平城太上天皇宮（平城西宮）の時期にあたり、宮殿の南にSB7803が建つほかは、朝堂院に顕著な遺構は確認できない。

Ⅱ期の建物の大半は、延暦3年（784）の長岡京遷都にともなう平城宮放擲後も存続していたとみられる。大同4年（809）に平城太上天皇により平城西宮が造営され、平城遷都が果たされるが、造営直前までⅡ期の建物群が残されていたかどうかについての判断は保留しなければならない。それは出土土器の編年研究、とくに実年代の考定作業が、そうした議論に精緻な解答を付与しうる水準に至っていないことが背景にある。今後研究を進めていくべき課題として残される。

この時期の後半、天長2年（825）以降は、平城太上天皇の親王により維持管理されるが、史料からみる限り、居所としての実態は詳らかにし得ず、もっぱら平城旧京の所領経営の拠点としての性格を強めていくのであろう。

奈良文化財研究所による平城宮跡の計画的・継続的発掘調査が始められてから、すでに半世紀が経過した。その中で、平城宮中枢部についての調査研究は重点的に進められ、すでに第一次大極殿院地区、内裏地区、第二次大極殿院地区の発掘調査の成果を学報として公開している。

本書では第一次大極殿を含む大極殿院地区全体の検討を試みた。奈良時代の前半と後半期で著しく様相を变じるこの地区の歴史過程を、より明晰にしえたと考えるが、なお課題は多く残されている。今後、中央区朝堂院、東区朝堂院についての調査成果の分析を進めるとともに、中枢部の周辺に展開する未発掘部分の発掘調査研究を推進することによって、平城宮史、奈良時代史のいっそうの解明を期したいと思う。

---

1) 関野貞1907『平城京及大内裏考』（東京帝国大学紀要工科第3冊、東京帝国大学工科大学）。